

## 親愛なるテツへ

川島文絵

大分県・四四・公務員

この前ある試験を受けるために大学へ行きました。私たちが出会った法学部の建物はすっかり老朽化し、過ぎさった時間がいかに長いかを物語っていました。

「ノートを貸してもらえますか」

あなたが初めて私の人生に現れたあの日から、二三年がたとうとしています。

私たちは就職して離れ離れになり、距離以上にあなたの心は遠ざかりました。それを認めるのには、とても長い時間が必要でした。淋しさをのりこえ、私の生活を樂しめるようになった頃、あなたからの電話がありました。

「大分に行きます。会いましょう」

一年ぶりのあなたの笑顔は昔のままでした。二人で山下湖畔を歩きましたね。暖かい冬の午後でした。悲しい別れをした恋人ではなく、まるで古くからの友人のようにいろんな話をしましたね。そして会話がとぎれると、その度に「元気でしたか」と、

あなたは静かにくり返すのでした。

駅であなたの乗った電車を見送り、駐車場にとめていた車の数歩前まできたとき、突然涙があふれてきました。

二人が一緒の人生を歩めなかったことを、私はきつちりと受けとめていました。これからはあなたを友人としてみつめることができる自信もありました。けれど、二人ですごしたあの場所にはもう決して戻れないのだと気付いたのです。私が愛したテツ、私を愛してくれたテツにはもう二度と会えない――。胸がはりさけそうでした。

私は今とても幸せに生きています。それでも時折、風の色、空気の匂い、夜の音にあの頃のことを思い出します。とても切なくなります。でも、この想いをこれからも大切にしていこうと思っています。

この手紙が届いたら、どうぞ電話をください。そして、また「今でも僕のことを思い出してくれていますか」ときいてください。

\*生まれて初めての恋。そして一生に一度きりの恋でした。もう一度生まれ変わって、また失恋に終るとしても、やっぱり彼を愛したいと思います。